

< 目次 >

1. 事務局より
2. 前年度編集責任者より
3. 新編集委員より
4. 本年度編集責任者より
5. 運営担当より
6. 例会予定
7. 談話会予定
8. 各地の研究会だより
9. 海外情報
10. メーリングリスト frenchling からのお知らせ
11. 2016 年度収支決算報告
12. 編集後記

1. 事務局より

事務局が早稲田大学に移って三年目を迎えました。事務局業務は酒井(早稲田大学)と守田(京都大学)で分担しています。連絡先は次のとおりです。

〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1
早稲田大学文学学術院 酒井智宏研究室内 日本フランス語学会事務局
belf-bureau@list.waseda.jp

◆会費

会費の徴収は郵便振替で行っています。『フランス語学研究』に同封する振込用紙をご使用ください。3年以上会費の納入が滞っている場合は会員資格が停止され、『フランス語学研究』は送付されなくなりますのでご注意ください。最新号の『フランス語学研究』第51号は2014年度以降に会費を納入された方にお送りしています。

◆投稿規程の変更

従来『フランス語学研究』への投稿は11月末日までに原稿を事務局宛に郵送することとなっていたが、第51号から事務局にメールで投稿するように変更されました。今年11月末日締切の第52号につきましても、郵送や編集委員による持ち込みは受け付けられませんのでご注意ください。詳細につきましては第51号に記載されている投稿規程をご参照ください。

◆機関誌バックナンバーのアーカイブ化について

2017年4月現在、CiNii(国立情報学研究所の論文情報ナビゲータ)がサービスを停止し、J-STAGEだ

けが電子媒体の公開先となっております。『フランス語学研究』については第46号、47号のみが公開されており、これらを除く創刊号から本年度公開予定の第48号までについて、事務局で公開のための作業を進めております。したがって現在、一時的に電子ファイルという形ではほとんどのバックナンバーが入手できない状態になっており、会員の皆様にはご不便をおかけして申し訳ありません。CiNiiから引き渡されたデータでは、フランス語の文章に関してあらゆるアクセントや文字装飾が抜け落ちている状態だったため作業に時間を要しております。公開準備のできた新しい号から順次公開する予定ですので、これらの事情につきまして引き続きご理解頂きますよう、よろしくお願い致します。(酒井智宏・守田貴弘)

2. 前年度編集責任者より

このニューズレターとともに、『フランス語学研究』第51号が皆様のお手許に届いているものと思います。この原稿を書いている時点では、まだ、再校の途中なのですが、第51号を受け取り手にした時に覚えるであろう安堵感を今から想像しています。

長年、編集委員会の末席を汚してきましたが、いつかは編集責任を務めないわけにはいかないだろうと思っていました。一昨年の末に編集責任の依頼を受けた時は、校務も忙しくて悩みました。しかし、先送りにしたところで今後どうなるか分からなかったのが、これが時機なのだろうと思い、引き受けることにしました。

このような心持ちで編集責任に就任しましたので、第51号の意味について余り深く考えていませんでした。しかし、実はこれはとんでもない号だということに後から気がつきました。というのも、前号の第50号は、本誌の半世紀にわたる歴史を記念する充実した内容で、しかも、泉邦寿先生が本誌のこれまでの歴史を振り返った上で、今後の展望を示されていたのです。これを受けた次の半世紀の最初の号なのです。これはえらい時に引き受けてしまったと思いましたが、後の祭りでした。

結局のところ、第50号のような立派な企画を立てることもなく、本誌の次の半世紀の初頭を飾るといったような号にはなりません。しかし、ささやかではありますが、私なりにできることをしました。新刊紹介は、近年は編集委員が執筆している場合が多かったのですが、今回は、一般会員や非会員でもふさわしい紹介者がいる場合には、積極的に投稿を依頼しまし

た。そのお陰もあって、過去数年間の平均が約5本に対して、11本掲載することができました。その中で若手による研究書を2冊紹介できたことも喜ばしいことでした。また、言語学が専門でない一般会員にも読みやすい「フランス語質問箱」も3本と多く掲載できました。多くの会員にとって有益な情報を提供していくという方向性を示すことができていると思います。

第51号についてはこんなところですが、今回、編集責任を務めて、改めて本誌や学会の現状と今後について考えました。最近の人文系の危機的な状況の中で、日本フランス語学会も安閑としてられません。そう考えた時に気になるのは、学会誌に投稿そして掲載される論文などの分野が偏っているのではないかということです。今後の学会の存続と発展を考えると、もっと多くの研究者が学会活動に参加し、学会誌に執筆していくようにする必要があるのではないのでしょうか。このような問題意識を持って、学会の今後の活動について編集委員会で新たな提案をさせて頂き、基本的な方針を認めてもらいました。次年度にはこれを進めていくことになると思います。学会員のみならずには、なにとぞ、日本フランス語学会の振興のためにご協力を頂きますよう、心よりお願い申し上げます。(平塚 徹)

3. 新編集委員より

◆安齋有紀(島根大学)

今年度より編集委員としてどうぞよろしくお願い致します。丁度私が大学院に進学した頃、フランス語学会の例会は青山学院大学で開かれていました。当時同大学の院生になったばかりの私にとって、例会はそれまでに文献として読んだ本や論文の著者である先生方の研究について、ご本人から「生」で話を聞く初めての機会であり、他大学の院生とも知り合えるとても刺激的な場でした。同時に、毎日通うキャンパスで毎月必ず参加する身近な存在でもあり、自分の研究活動の出発点となりました。その後も語学会での出会いを通して多くの方からアドバイスをいただき、研究を続ける上での大きな支えとなっています。研究する者にとって貴重な場であるこの会に、この度微力ながら尽力する機会をいただけてとても嬉しく思うと同時に、身の引き締まる思いです。現在取り組んでいる話し言葉の研究は、留学したパリ第3大学での様々な出会いから始まりました。もともと関心のあった話し言葉のデータ収集に始まり、コーパスの作成と分析の方法を基礎から習い、日々パソコンの前で casque をつけて音声データと分析ソフトと格闘していました。そのような初めて尽くしの作業も慣れてくると楽しくなり、自分で説明することができるのかと思うような厄介な例に度々遭遇しながら、その分析を通して自分

の研究に何だか新しい道が見えてくるような新鮮な感覚を味わったのでしょうか。それ以降、話し言葉のコーパスを使った研究を中心にしています。ここ数年は主に談話マーカ―の機能について考えていますが、もちろんマーカ―には多くのタイプがあるので、マーカ―が使われる際に観察される周辺の言語現象に注目しながら、それぞれの特徴を明らかにしようと試みています。今後は積極的に研究の発信をして、多くの方と情報交換をしていきたいと思っています。

◆奥田智樹(名古屋大学)

私のこれまでの経歴は、フランス語学と日本語学の間を何度も行き来するものでした。日本の出身大学院では仏語仏文学専攻に所属していたものの、フランス留学中に日本語学を専門とする指導教授のもとで日本語学の世界と出会い、日仏対照言語学という分野に自らの専門を模索することになりました。当時は、フランス留学中に日本語学に関する文献をわざわざ日本から取り寄せなければならぬことに戸惑いを感じたこともありました。帰国後、就職先の名古屋大学では、そうした経験が一つの縁となって日本言語文化専攻という部局に職を得、大学院で15年近く、主にアジア諸国からの留学生を対象に日本語学の授業を担当してまいりました。彼らは、日本語については時として母語話者以上に鋭い言語的直観を発揮してくれましたけれど、フランス語の知識は全くなく、そのため授業でフランス語に関する話は一切出来ませんでした。また、フランスで行われている *linguistique japonaise* を振りかざしてみても、日本語学プロパーでやって来た人たちにはなかなか受け入れてもらえないという厳しい現実も思い知らされました。今年度から、大学内での組織の改編によって人文学研究科の仏語仏文学分野という部局に配置替えとなり、生まれて初めて、フランス語を専門とする学生を対象に、私にとっての原点であったフランス語学の授業を担当する機会を得ました。そして、それと全く時を同じくして、今回日本フランス語学会の編集委員のお話をいただいたことに、大変運命的なものを感じている次第です。

私がこれまで得てきた学問的な蓄積は、おそらく他の先生方とはかなり異質のものであろうかと思えます。ですが、これからもフランス語学と日本語学の二足のわらじを履きつつ、編集委員としての責務の重さを肝に銘じて、一生懸命務めさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

◆木田 剛(筑波大学)

2017年度より編集委員を務めることになりました。学士課程も含めて、日本の大学を出ていないので、日本の学会と縁があまりなかったのですが、先輩メンバ

一の方々に勧められて学会には所属させていただいています。もともとパリで建築学を勉強するために渡仏したのですが、フランス語を学習しながらことばの諸問題に関心を持つようになり、エクス＝マルセイユ大学（通称プロヴァンス大学）で一般言語学を教わりました。研究領域は第二言語習得とマルチモダリティ・ジェスチャー研究。心理言語学者と思われがちですが、指導教員が社会言語学系だったので、語用論、談話分析、相互行為論あたりが主な学術的バックグラウンドになります。ただ、博士論文を音声言語研究所（Laboratoire Parole et Langage）で執筆した関係で、どうしても実験言語学的な思考方法から抜けられない自分がいます。あの研究所独特の、機械と数式にまみれた理系的な雰囲気、試合前の体育系のような盛り上がり、異分野の研究者との共同研究の醍醐味などはなつかしいばかりです。これまではミクロな言語学研究が多かったのですが、ミクロな中にもマクロな要素があることに気づき、より大きなスケールで言語現象を見るようになりました。最近の関心は言語社会学、とくに経済と言語の関係、ポピュリズム言語、紛争（管理）言語などで、歴史の中でどのような社会経済的圧力で言語が維持・進化するのか、社会生活の中で言語文化はどのように位置づけられているのか、グローバル社会の中でことばの役割はどのように変化しようとしているのか、そのようなことを考えています。日本では言語学関連の授業のほか、フランス文化や教職、そしてグローバル人材育成関連の科目を担当していますが、もう少し自分の専門に近いことを教えられる日が来ることを祈っています。今後ともよろしく願いいたします。

◆近藤野里（名古屋外国語大学）

今年度から編集委員に加えていただくことになりました。例会に初めて赴いたのも、初めて発表させていただいたのも、2010年4月の例会でした。学部時代、言語学の授業といえば生成文法に基礎が置かれたもので、残念ながら当時は興味を惹かれませんでした。言語学を勉強してみたいと思ったのは、ICUまで非常勤にいらっしやっていた川口裕司先生の授業を履修したのがきっかけでした。川口先生の授業では、Praatを使用した音声分析の方法やコーパス言語学などについて学びました。言語音がスペクトログラムという形で目に見えることや、コーパスに基づいた言語分析が目新しく感じられ、こんな形の言語学研究もあるのか！と感動した記憶があります。それがきっかけで、東京外国語大学大学院に進学しました。博士課程に進んですぐにモントリオール大学へ1年間留学しました。モントリオール大学では、統語論、意味論、言語習得論、なかでも私が苦手としていた生成文法が

基礎となっており、さらに北米的な、量で勝負という感じの宿題が課され、本当に沢山の論文を（泣きながら）読みました。良くも悪くも追い詰められたせいなのか「言語学とはいったい何なのか？」ということを考えるようになり、また「音に関わる現象だけを追いかけているだけでは、ことばの研究をしているとはいえないのではないか？」と思ったのを覚えています。言語学に対してもフランス語学に対しても、もう少し心を開いて学ぶ機会を増やそうと思い、例会にできるだけ足を運ぶようになりました。現在は主に2つのことに関心があります。①文法書を資料として、発音規範の変化と音声変化の関係性を記述するという文献学的な研究に取り組んでいます。②ケベックのフランス語に関する論文を分野横断的に読んでいます。この変種については、通時的観点と社会言語学的観点から大変興味があります。どうぞよろしく願いいたします。

◆杉山香織（西南学院大学）

大学院生のとき、フランス語学会で発表をしたり、他の大学院生や先生方の発表を聞き、勉強する機会がありました。その後留学したり、関東を離れることになり、なかなか学会には足を運ばずにおりました。そんな折、研究促進プログラム「パロールの言語学」の話を聞きました。メンバーとして『初級フランス語学習者における発話能力の特徴』に関する研究を進めることができました。そして、今年度より編集委員としてフランス語学会に関わることになりました。このように再びフランス語学会との関わりが増え、嬉しく思います。

私は、フランス語学習者の使用語彙についての研究を行っております。特に自由会話において、学習者がどのような語彙を多く使用したり、あまり使用していないのかを、母語話者のデータと比較したり、異なるレベルの学習者間で比較して、記述しています。このような学習者の過剰使用語や過少使用語を記述することで、学習者の言語発達を分析しています。最近、学習者の受容語彙知識の研究も始めました。学習者はどのような単語の意味を知っているのか、それらの単語についてどのくらいの知識があるのか、またはどのような単語知識が足りないのかを、リーディングタスクを通して測定しています。将来的には、語彙知識が産出語彙に与える影響を研究していけたらと思っています。

編集委員として、フランス語学会に少しでも貢献できたら幸いです。これからどうぞよろしく願いいたします。

4. 本年度編集責任者より

このたび、BELF52号の編集責任を務めることになりました。フランス語学会では数年来、どのようにして、扱うテーマの幅を広げ、多様な観点からフランス語を研究する方々に興味を持っていただけるかということが課題となっていました。この点、数年前導入された「研究促進プログラム」は資するところ大であり、それぞれ44号と50号の別冊として刊行された「ことばを(で)遊ぶ」、「パロールの言語学」では、ベテラン、中堅の方々と並んでフレッシュな若手の方々による、多様なテーマを扱った論考を読むことができます。

このような動きをBELFの本誌そのものに反映させるべく、前号51号の編集責任・平塚氏の提案に基づいて、3月の編集委員会において今後のBELFの活動方針に明確な方向性が与えられました。その詳細については、2017年度中に、公にする予定です。自分の役目は、こうした学会活動のウイングを広げるという路線を着実に進めること、加えて若手の方々が積極的に発表や投稿ができるよう環境を整えることだと理解しています。

またここ数年来、様々な機会を通じて、フランスに腰を据えて精力的に活動されている方々と知り合い、そのご活躍の一端に触れることもできました。こうした方々には、後に続く若手を育てるためにも、蓄えた経験と知見をお伝えいただき、本学会の振興に力を貸していただければ幸いです。

と偉そうなことを書きましたが、個人としては、名詞句の定性、不定性、複数性といった目新しくもないテーマを研究しています。加えてLangues et Grammaires en (Île-de-)France (LGIDF)という、言語研究によって得られた知見をUPE2Aでのフランス語教育に活用するというプロジェクトに参加し、ポツポツと資料を作って提供するといったこともしています(もしこの活動に興味を持ってくださる方がおられれば、ご協力いただければありがたく思います)。

そうした中、最近数年ぶりにテニスを再開し、30年ぶりに車の運転を再開し、40年ぶりにピアノの練習を再開しました。これが呼び水となり、新しい会員の方々に加えて、学会活動からしばらく離れておられた方々にも戻ってきていただけないか、例会での発表や学会誌への投稿をさせていただけないか、などと考えています。それでは1年間どうかよろしく願いいたします。

(金子 真)

5. 運営担当より

新しい学期を新しい学校で迎えることになり、今までにはなかった、理論言語学を専門とする学生たちと交流する機会が増えました。彼らを前に、彼らの研究

している理論を批判し、疑問を投げかけるような発言をしたとき、講義はそのまま議論の時間になり、あっという間に終了の時間がやってきてしまいます。そういう経験がどこまで自分の研究に直接的に反映されるのかは分からないけれど、議論を通して「また今週も、考えが一步進んだ」という気持ちになります。

考えが進んだと思えるには少なくとも2つの条件があるようで、1つは「他の誰でもなく自分が一所懸命考えること」であり、もう1つは「臆することなく、学生からアホだと思われようとも話してみる」ということのようにです。考えてみても話さなければ伝わらないし、自分の考えもなく人の意見を聞くだけでいったい何が進むのか、ということです。自分が学生だった時代から今に至るまでこの研究の進展構造は変わっていないようで、ただ一つ変わったのは、考えることを学生たちも自由に言える環境を整えることが私の責務に加わっているということです。

思い起こせば私がまだ学生だったとき、私にとって例会発表は心臓の縮む思いがする場であり、発表せずに出席しているだけのときにも意見を気軽に言えないように感じていました。自分自身がフランス語学の本流を生きてきた人間ではないことが引け目になっていたのかもしれませんが、どうもそれだけでもないようです。例会運営に加わるようになって6年、若い学生同士であってもさまざまにコメントし合い、誰もが闊達に意見を言い合える場になって欲しいという考えのもとで運営してきて、実際そのように変貌を遂げているように見えます。これは私の思い過ごしではないようで、「最近、雰囲気が変わった」と言ってくれる方に出会うこともあります。

この例会をもう一步レベルアップするために、今年度から「題目未定」のままの発表申し込みは受け付けないことになりました。発表間近になってタイトルを変えたいことはあるかもしれない。タイトルを決めてから何ヶ月も考える時間があると、その間に研究の方向性が変わることもあるかもしれない。それでも、人前で発表すると決めたからには、自分が何について考え、どう研究し、何を主張しようとしているのかをできるだけ明確にしておいてもらいたいと考えています。きっとその方が「発表して良かった。おかげで考えが進んだ」と思えるはず(この点、今年のニューズレターも是非ご覧ください)。また、ホームページで例会予定を公表している以上、対外的にもフランス語学会が健全に運営され、研究も盛んなのだと思ってもらえることもできます。

今後とも例会に参加するすべてのみなさんにとって「参加して良かった。また賢くなれた」と思ってもらえる場となるよう、運営業務に務めて参ります。

(守田貴弘)

6. 例会予定

日本フランス語学会では、毎年4月から12月まで(7月と8月を除く)月一回、原則として土曜日15時から18時に例会を開いています。一回の例会では通常二人の方が研究発表を行います。

例会案内はホームページによる他、メーリングリスト frenchling でも流しています。

例会はフランス語学会の会員以外の方でも、自由に来聴することができます。入場も無料です。みなさまのご参加をお待ちしております。

会場：早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)

アクセス：

地下鉄東京メトロ 東西線 早稲田駅 徒歩3分

副都心線 西早稲田駅 徒歩12分

JR 山手線/西武新宿線 高田馬場駅 徒歩20分

発表のご希望やその他例会に関するお問い合わせ：

酒井智宏(例会運営担当 / 早稲田大学文学学術院)
t-sakai@waseda.jp

以下はニューズレター編集段階の5月3日現在の予定です。最新の予定は学会ホームページで確認してください。

第313回例会 2017年5月13日(土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス) 33号館16階第10会議室

(1) 新田 直穂彦(東北大学大学院修了)

「副詞 *invernement* の機能について」

(2) 曾我 祐典(元関西学院大学)

「間一髪の事態を表す <副詞句+主節>」

司会：酒井 智宏(早稲田大学)

第314回例会 2017年6月17日(土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)33号館16階第10会議室

(1) 西脇 沙織(フランス国立パリ社会科学高等研究院博士課程修了)

「命題的現象と発話事象の現象:アイロニーを例として」

(2) 発表者未定

司会：酒井 智宏(早稲田大学)

第315回例会 2017年9月30日(土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス) 33号館16階第10会議室

(1) 小川 彩子(関西学院大学大学院研究員)

「<強勢形人称代名詞+関係節>型構文についての一考

察」

(2) 佐々木 幸太(関西学院大学非常勤)

「X mettre Y Z 再考: Y と Z が人の場合」

司会：守田 貴弘(京都大学)

第316回例会 2017年10月21日(土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス) 33号館16階第10会議室

(1) 楊 鶴(筑波大学大学院)

「フランス語の暴力表現としての *là* の機能」

(2) 長沼 剛史(京都大学大学院)

「指示形容詞を用いた総称文について」

司会：酒井 智宏(早稲田大学)

第317回例会 2017年11月11日(土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)

(1) 田代 雅幸(筑波大学大学院)

「連辞 *par contre* と *en revanche* について」

(2) 川上 夏林(京都大学大学院)

「再帰代名動詞の心理的用法について」

司会：守田 貴弘(京都大学)

第318回例会 2017年12月9日(土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)

(1) 発表者未定

(2) 発表者未定

司会：酒井 智宏(早稲田大学)

7. 談話会予定

以下の情報は4月現在のものです。最新の情報は学会ホームページにてご確認ください。

日時：7月22日(土) 15時~18時

会場：未定

(追ってフレンチリングでご連絡致します)

テーマ：「フランス語の多様性」

パネラー：川口裕司(東京外国語大学)

Sylvain Detey(早稲田大学)

近藤野里(名古屋外国語大学)

世話人：田原いずみ(明治学院大学)

秋廣尚恵(東京外国語大学)

多数の方々のご参加をお待ちしております。

(秋廣尚恵)

8. 各地の研究会だより

◆関西フランス語研究会

本研究会の会場は原則的には関西大学ですが、都合により大阪なんばにある大阪府立大学のサテライト I-site でも何度か行いました。昨年度の発表は以下の

通りです。

7月9日

宮脇玲奈「場面を導入する大過去形」

9月17日

津田洋子「現象描写文と出来事存在量化一 (ILY A) 『名詞句+関係節』の分析を中心に」

10月29日

佐々木香理「接頭辞 RE の機能—rentrer の場合再考—」

11月19日

小川彩子「<強勢形人称代名詞+関係節>型感嘆文についての一考察」

12月17日

佐々木幸太「mettre に関する一考察～移動対象・移動先が人の場合～」

1月21日

曾我祐典「『間一髪』の半過去形・大過去形」
近藤野里「19世紀末のフランス語の発音・Paul Passy の le Français Parlé の分析を基に」

この研究会では、論文や学会発表をひかえる人がその準備のために発表したり、論文を完成したり学会発表を終えた人がその内容を紹介したりしています。形式にこだわらず、気軽に意見・情報の交換ができる集まりです。また、新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども歓迎します。

平塚徹：

hiratuka@cc.kyoto-su.ac.jp

大久保朝憲：

tomonori@ipcku.kansai-u.ac.jp

(大久保朝憲)

◆東京フランス語学研究会

東京フランス語学研究会は、大学院生など、若手を中心としたフランス語学研究者の気楽な研究発表、議論、交流の場です。多くのかたがたに参会していただきやすいよう、フランス語学会の例会がひらかれる日に、同じ(または近接した)会場で、原則として13時から14時30分まで開催します。フランス語学会の例会の会場が変更されるときや、編集委員会などと

重なるときは開催せず、年間6回程度の実施を目安とします。

会員資格、発表資格、会費などの制度は設けませんので、関心のあるかたはどなたでも自由に参会、発表していただけます。発表は、フランス語(学)に関係することであれば、どのようなテーマでもかまいません。また、完成された内容である必要もありません。学会発表の前段階にあたるような習作的な発表や、先行研究に対する論評といった形の発表も歓迎します。

5月3日現在、今後の研究会の予定は、つぎのようになっています。

第32回研究会

日時： 2017年5月13日(土)13時から14時30分
会場： 早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)33号館16階第10会議室

発表者： 伊藤玲子(東京外国語大学大学院)

題目： 現代フランス語における前舌母音[a]の前の破裂音[k][g]の口蓋化現象について

第33回研究会

日時： 2017年6月17日(土)13時から14時30分
会場： 早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)33号館16階第10会議室

発表者： 井上大輔(上智大学大学院)

題目： 未定

第34回研究会

日時： 2017年9月30日(土)13時から14時30分
会場： 早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)33号館16階第10会議室

発表者： 田代雅幸(筑波大学大学院)

題目： 未定

第35回研究会

日時： 2017年10月21日(土)13時から14時30分
会場： 早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)

発表者： 未定

第36回研究会

日時： 2017年11月11日(土)13時から14時30分
会場： 早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)

発表者： 大河原香穂(東京外国語大学大学院)

発表を希望なさるかたは、下記ホームページの「お問い合わせ」の項目から世話人あてにご連絡ください。最新の予定については、ホームページの「今年度の研究会」の項目でご確認ください。

東京フランス語学研究会ホームページ :

<http://lftky.jimdo.com/>

(渡邊淳也・塩田明子)

9. 海外情報

今回は社会科学高等研究院 (École des Hautes Études en Sciences Sociales) で学位をとられた西脇さんに、同研究院での情報を紹介していただきます。

◆フランス国立パリ社会科学高等研究院 (École des Hautes Études en Sciences Sociales, Paris)

私はフランス政府給費留学生として2013年9月にフランス国立パリ社会科学高等研究院 (以下 EHESS と略記) の博士課程に入学し、2016年11月に修了しました。指導教授は Mme Marion Carel でした。以下、EHESS での学生生活について簡単に報告いたします。

EHESS は修士課程と博士課程のみ設置されている高等教育研究機関で、行政上は grand établissement に分類されます。言語学分野の教授としては、Mme Marion Carel (論証理論, ポリフォニー理論) のほか、M. Michel de Fornel (社会言語学), M. Pascal Engel (言語哲学), M. François Recanati (言語哲学) らがいます。Mme Marion Carel は現在引退している M. Jean-Claude Anscombre と M. Oswald Ducrot の言語内論証理論をヒントに意味論的ブロック理論を創始したほか、M. Oswald Ducrot やトゥールーズ大学の M. Alfredo Lescano とともに論証的ポリフォニー理論を発展させています。意味論的ブロック理論は言語内論証理論を原理化し、「あらゆる発話は “donc” と “pourtant” を含む論証的連鎖によってパラフレーズされる」をスローガンに、命題内容的意味について分析します。研究対象は操作子にとどまらず、語彙や時制、翻訳論などにも広がってきています。論証的ポリフォニー理論は「発話するとは、発話を談話の中で使用することである」をスローガンに、発話態度的意味について研究します。多声性は認めつつも、発話者の概念を排するなど、「Le dire et le dit」のポリフォニー論から大きく転換しています。現在、Mme Marion Carel はこれら2つの理論を援用し、EHESS の歴史学者である Mme Dinah Ribard と共に “je” の意味についての研究を進めています。私も両理論を用いて、フランス語のアイロニー発話の観察に基づき、命題内容的現象と発話態度的現象の対立について研究しました。

EHESS では11月から5月ごろまで séminaire と呼ばれる2時間の授業があります。私の場合は、週に2回指導教授の主催する séminaire があり、それに出席していました。出席者は10から15人ほどで、ほと

んどが Mme Marion Carel の指導する修士課程や博士課程の学生です。フランス人は少数で、大半が留学生でした。

授業のほかは9月から6月まで、月に1回論文指導がありました。私の場合、初めのうちは収集した例文の分析を見てもらっており、考えが固まった2年目(2015年)の1月ごろから博士論文を書き始めました。毎月、約束の日の1週間ほど前に、その月に進んだ分をメールで送ります。すると、指導教授が当日までに添削してくれており、それを見ながら、研究室で議論をします。内容が充分であれば次に進み、そうでなければ書き直しになります。最後に次の月の指導の日時を決めて別れます。これを3年間繰り返しました。

これ以外に、毎年6月に論証理論関連の研究発表会が行われ、その後は Mme Marion Carel 宅で夕食会をするのが恒例になっています。また、留学2年目には指導教授がブラジルで編集した雑誌に論文を寄稿する機会を与えられました。留学3年目(2016年)には指導教授とヌーシャテル大学の Mme Corinne Rossari 共催で2泊3日の école doctorale と称する催事がスイスで行われ、発表する機会を与えられました。

博士論文は2016年7月ごろ完成しました。まずは2名の審査員による論文の事前審査を経ます。それに合格したら、口頭試験の開催が許可されます。試験当日は30分ほどで論文の要旨を発表した後、5名の審査員による質問に順に答えていき、約4時間続きました。口頭試験の際は、関西大学の久保朝憲先生、慶応大学の喜田浩平先生が審査団のメンバーとして日本からパリにお越しくださいました。喜田浩平先生には事前審査も務めていただきました。また、学生時代を通じて常に元慶応大学の川口順二先生の助けがありました。ここに記して感謝いたします。

(西脇沙織)

10. メーリングリスト frenchling からのお知らせ

frenchling はフランス語学関係の情報交換を目的としたメーリングリストです。フランス語学関係の研究会や講演会といった催事の告知、文献の探索、あるいはフランス語そのものについての質問、疑問、そして議論に活用してください。利用にあたっては以下の注意をお守りください。当メーリングリストはフランス語学会と密接な関係にありますが、当学会専用のメーリングリストではありません。フランス語学会を含め、特定の学会員だけを対象とした連絡には使用しないでください。逆に学会員以外にも開かれたオープンな会合や呼びかけにはどんどん利用してください。ただし、特定の政治的メッセージを含むもの、営利的な活動、アルバイト募集等の研究・教育と関係のないアナウンスなどはご遠慮ください。なお、フランス語関

係の教員の募集に関する情報は流していただいて問題ありません。設立当初はフランス語に関する議論がこのメーリングリストで盛んに行われたものですが、最近はそのようなことも少なくなったのが残念です。フランス語の研究や教育に従事している我々は、フランス語に関して日々新しい発見や疑問を持つことも多いかと思いますが、そのような発見や疑問を共有するためにもこのメーリングリストを利用していただければと思います。学生さんたちも含め、皆さんがもっと気軽に利用してくだされば我々としても管理のしがいがあります。

現在, frenchling は Google グループサービスを利用して運営しています。frenchling のアドレスは g-frenchling@googlegroups.com です。新規の登録、アドレス変更、あるいは退会の場合は直接、以下の管理グループのアドレスまでご連絡ください。メンバー以外の方に登録を勧められる場合も、管理グループのアドレスをお伝えください。

管理グループアドレス：

g-frenchlingowners@googlegroups.com

それでは g-frenchling をどうかご活用ください。

(frenchling 管理グループ)

1 1. 2016 年度収支決算報告 (*)

(単位 円)

収入の部

会費	723,000
機関誌売上金	91,000
広告収入	88,000
預金利息	389
学会経費補助 (早稲田大学)	50,000
小計	952,389
前年度繰越金	3,509,351
計	4,461,740

支出の部

BELF50 号 (本冊および別冊) 印刷代 金	1,120,932
BELF51 号編集実費	77,744
ニューズレター印刷代金	18,252
発送費・通信費	59,149
特別発表 (講演) 謝金	180,000
会場費	0
事務消耗品費	15,804
振込手数料	20,078
ホームページ管理費	9,818
言語系学会連合会費	10,000

小計	1,511,777
次年度繰越金	2,949,963
計	4,461,740
次年度繰越金の内訳は以下のとおり	
銀行預金 (三井住友銀行普通預金)	762,456
(三井住友銀行定期預金)	2,007,436
郵便貯金 (普通)	38,884
(振替)	46,098
現金	95,089
計	2,949,963

(*) 2017 年 3 月 31 日現在の収支決算報告。5 月に開催される編集委員会で会計報告と監査報告がなされ、審議のうえ承認の手続きがとられる。

〒 162-8644

東京都新宿区戸山 1-24-1
早稲田大学文学学術院 酒井智宏研究室内
日本フランス語学会

1 2. 編集後記

今年度も、執筆者、関係者のみなさまのご協力のおかげで、ニューズレターを編集・発行できるようになりました。まことにありがとうございます。

昨年度までは原稿依頼や編集を渡邊が担当し、印刷所にひきわたす版下を平塚徹さんが作成くださっておりましたが、今回平塚さんが編集責任を担われることになりましたので、版下作成まで渡邊が担当しました。これまでと違った仕事をするのは、ほかの方がこともなげになさっている（ように見える）ことが、どれほどむずかしいかを知る機会になります。

毎年フランス語フランス文学会春季大会の時期にあわせて実施しているシンポジウムについては、ニューズレターに掲載しないのか、というご質問をいただきました。これについては、シンポジウム実施直後にニューズレターが届くというタイミングであるため、これまでは掲載しておらず、翌年の『フランス語学研究』本冊に報告を掲載するというにしておりました。しかし、他の方法も考えられるかもしれません。ご意見をお寄せいただければ幸いに存じます。

(渡邊淳也)

♪ ニューズレターのバックナンバーは、日本フランス語学会のホームページで読むことができます。

<http://www.sjlf.org/>